

## (1) 事業名称等



鎌倉市玉縄城址周辺



国指定 重要文化財  
旧石井家住宅

【事業名称】 鎌倉・玉縄の重文古民家と歴史民俗資料館の管理活用事業

【実施団体】 玉縄城址まちづくり会議

【事業経費】 520,000円

## (2) 事業の目的

玉縄城址まちづくり会議では、地域インフラを創るのは「ボランティアの力」であるとの考えをもとに活動している。この考えを基本に「足元にある歴史の素晴らしさ再発見と共有」をめざし、これによって「鎌倉・玉縄フィールドミュージアム」、そして「鎌倉・玉縄の新しいまちづくり」を市民行政の協働で達成させることを活動目標にしている。

こうした当会の活動目標を背景として、今回の文化庁委託事業においては、地域の文化財建造物を再発見すること、これを地域ぐるみで活用すること、「文化を繋ぐ、歴史を繋ぐ、手技を繋ぐ、人々を繋ぐ、未来へ繋ぐ」という5つの繋ぐ課題を達成することを事業目的とした。



事業委員会で各事業を推進した

「市民行政の協働による新しい玉縄のまちづくり」



### (3) 事業活動の内容

#### 重文古民家と歴史民俗資料館で以下の5つの「繋ぐ」取り組み

- 1、文化を繋ぐ：若い母親と異世代交流の「昔のくらし衣食住」ワークショップ
- 2、歴史を繋ぐ：地域史の素晴らしさを再発見し共有し合うイベント
- 3、手技を繋ぐ：唐箕、桶、実繰り、城域模型等の補修、動態展示・竹細工制作
- 4、人々を繋ぐ：重文古民家と歴史民俗資料館での市民キュレーター養成講座
- 5、未来へ繋ぐ：市民学芸員による小学生むけ社会科体験学習対応の総合的強化



古民家ワークショップ



【綱成の日】綱成役は松尾市長



この次は家族と来てね



### 3、手技を繋ぐ：唐箕、桶、実繰、城域模型等の補修、 動態展示・竹細工製作



高校生が唐箕を掃除



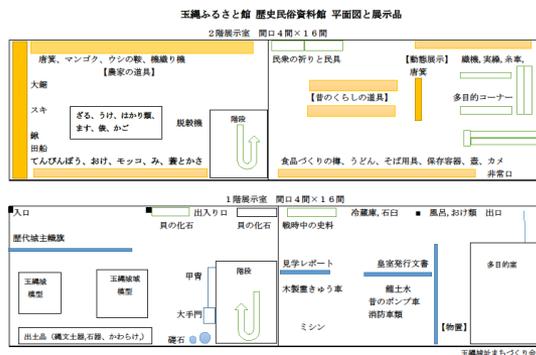
展示品が甦るとき



火吹き竹、竹トンボの製作



視察の文化財部次長



歴史民俗資料館平面図



秤もいろいろあるのね

## 4、人々を繋ぐ：重文古民家と歴史民俗資料館の 市民キュレーター養成講座



専門的勉強に取り組む

江戸時代の箱を発見

龍土水を動かす

縄文人の遺物

1日目：羽毛田横浜市歴史博物館学芸員の「キュレーターの仕事の入門編」、展示品の保存実習では、展示机の下にあった古い箱が赤外線カメラによる時代判定で「江戸時代の念仏講の道具箱」と分かり感激。貴重な体験学習を得た。

2日目：浪川鎌倉国宝館学芸員により「石井家住宅が関谷の倉骨から龍寶寺に移築された経緯」を知った。その構造から鎌倉では最も古い様式の民家であることから鎌倉の民家で唯一「重要文化財」に指定されたことを学んだ。また松島義章地質学理学博士には、柏尾川の改修で出てきた「貝の化石の展示方法」の指導を受ける。2万年前にタイムスリップした気分で学習した。

3日目：2グループに分かれて民具の補修を開始。増川委員の先導役で民具補修を進め、秤類、唐箕、実繰り、桶などを動態展示用に補修した。玉林文化財課学芸員には「身近な文化遺産を見つける感性の磨き方」を具体的に伝授してもらい、鎌倉唯一の歴史民俗資料館を活用する大きなヒントを得た。

## 5、未来へ繋ぐ：市民学芸員による小学生むけ 社会科体験学習対応の総合的強化

毎年3学期に鎌倉の小学生10校800人以上が体験学習



囲炉裏の顔合せ



歴代玉縄城主の旗



米俵,モミ,玄米,白米,榊もある



人気のダルマストーブ



大先輩から綿の実繰り指導



教室ではできない体験学習

## (4) 事業の成果

- ・若い母親と家族、各世代層に重文古民家の関心が生まれ活用の接点ができる
  - ・子どもに「触る・動かす・やってみる」楽しさを実感させ、学ぶ機会を提供できた
  - ・受講者に展示の仕方、整理の仕方など学芸員の「いろは」を植えつけられた
  - ・古民家、資料館を「触る、嗅ぐ、聴く」感覚解放の場にする体験指導のヒントを得た
  - ・子どもたちに伝える楽しさ、伝える難しさ、伝える責任を改めて体感できた
  - ・一挙にスキルアップし、玉縄フィールドミュージアムのガイド育成の自信も得られた
  - ・会員の学習意欲が刺激され、「市民学芸員」への道筋をつけることができた
  - ・受講者も企画者も、生活者感覚で地域史を捉える新たな視点を得られた
  - ・地域史を知ることが郷土愛の入口であることを受講者に感得してもらえた
- 一等々、5つの繋ぐ事業から得られたことは、受け手にも送り手にも実に大きかった。この経験知をもとに、重文古民家と民俗資料館のあらたな活用事業の可能性が広がってきた。文化財建造物を起点とする地域づくりの展望も開けてきた。

## 参考～受講者のアンケートの声（抜粋）

- ・地域史を知ることによって郷土愛的なものを感じる。古民家と資料館の初体験、「面白！」
- ・手で触れる楽しさを実感。子どもに「触る・動かす・やってみる」の機会を提供できた。
- ・会員自身の学習欲も刺激された！「市民学芸員」へ意欲が湧いた。
- ・展示の仕方、整理の仕方、その大切さ。学芸員の「いろは」を知った。やる気も膨らんだ。
- ・広報の思いつきー＜ふるさと館は地域の文化センター＞＜市民学芸員＞がポイントだ。
- ・囲炉裏正面の「旦那坐」の意味とは？ 筆筒、長持ちの一棹一棹の数え方の由来は？ 囲炉裏の五徳はなぜ3本足か？ など、教えると学びたくなる。学ぶと教えたくなる。
- ・触る、嗅ぐ、聴く、その体験教育の大切さ痛感。古民家、資料館は感覚解放の場です。
- ・子どもたちに伝える楽しさ、伝える難しさ、伝えるスリル、市民学芸員の専有特権です。
- ・発見、念仏講の箱に庶民の祈り。縄文の貝、自然と一体を示す農具、民具に懐かしさ！
- ・ああ、こんな暮ししてたの。ああ、大変だったのね。ああ、戻れないものか、あの頃に。
- ・お泊り、餅つき、炉焼き、洞窟探検、肝だめしなど、教室外の思い出づくりに協力せよ。
- ・イベント実施により企画者も参加者も、生活者感覚で地域史を捉える新たな視点を得た。
- ・一挙にスキルアップした！ 玉縄フィールドミュージアムのガイド育成にもつながるだろう。

## (5) 事業実施後の課題

5つの繋ぐ事業から得た経験知を「次にどう活かすか」が実施後の課題である。

- 文化財を活用することが文化財を守っていくこと—といえるような活用事業の企画。
- 市民が自分たちが当事者だと思わせるような企画。
- 文化財保全の「当事者はあなた」と訴え地域を巻き込むイベント情報の提起。
- 文化財建造物に相応しい活用事業が前提ながら、同時に重文古民家と民俗資料館を「玉縄フィールドミュージアム」の起点として捉えることで広がる活用の可能性を、正確に見据えて事業企画を行うこと。
- 文化財建造物の啓発情報は、イベント単位で「クチコミ広報」を進めること。
- 広報紙もHPも単なる情報の平積みでなく「事業キャンペーン型」の提起を行うこと。
- 活用事業を会員自身の自己啓発にどのように繋げていくか。会員→市民学芸員をどう実現していくのか。こうした自他教育を明確なテーマとして持ち続けること。

## (6) 今後の展開

- ・5つの繋ぐ事業体験からいくつもの次への展開のヒントが生まれている
- ・重文古民家をコミュニティづくりの有効な場に活用するため「古老10人インタビュー」「子どもと古老のひそひそ話の会」など異世代交流イベントを組む
- ・小学生体験学習は当会のメイン事業であり、文化だけでなく里山活動でも展開させる
- ・動態展示は、自分がわくわくすることを選ぶ、それが子どもをわくわくさせるから
- ・洞窟体験、土間で餅つき、囲炉裏を囲む昔噺、など子どもの異世界体験を広げる
- ・「第3の教師」に会える場所に、教室外教育の中心にする
- ・古民家を地域文化の中心に：落語、邦楽会、薩摩琵琶、茶会、華道展等を展開
- ・幼稚園児から100歳まで【自作販売】する楽市楽座を古民家を中心に開く
- ・地域市民に積極的文化活動参加を呼びかけ。そのためのクチコミ広報を考えていく
- ・地域の店舗、施設と連携し、そこを拠点にボランティア参加を呼び掛ける



加藤小田原市長も来訪



フルート演奏者と華道家



一年中集う歴史ファン



玉縄城址まちづくり会議 一同

